

初級学習者の「話す力」を伸ばすための試み An Attempt to Improve Total Beginners Speaking Ability

杉浦千里（筑波大学留学生センター）

SUGIURA Chisato (University of Tsukuba)

要 旨

初級の学習項目を一通り学び終えても、実際の場面を日本語で表現できない学習者は少なくない。そこで、初級日本語学習者が既習の日本語を使って自身の現実を話すことを目的としてこの活動を行った。この活動を通じ、学習者は1)「話す型」を身につけ、2)既習の学習項目を駆使し、3)自身の経験や感情を生き生きと話すことができるようになった。

There are a lot of learners who cannot express a real situation in Japanese even after finishing a beginner level class. Therefore the author planned this activity with the aim that learners talk about their real life using Japanese that they have learned. As a result, the learners achieved the following; 1) they acquired “speaking patterns”, 2) made full use of their Japanese knowledge and 3) talked about their experiences and feelings naturally.

【キーワード】 話す力、ストーリーの再生、話す型、感情表現

1. はじめに 実践の背景

ある外国語を学んだら、その言葉で自身を表現したり、現実の場面で使えるようになりたいと願うのは自然なことだろう。しかし、「日本語を勉強してもなかなか話せるようにならない」「教科書の日本語はわかるけれど、自分の言いたいことは言えない」と嘆く学習者の声があり、一方で、「教えたのに使えない」「実際の場面になると英語になってしまう」と落胆する教師の声がある。この溝を埋めるためには、教科書にある「万人向け」の練習をするだけでは足りず、日本語を、学習者一人一人の経験や感情といった深い部分と結びつけて表現する練習を繰り返す必要がある。学習者の「言いたいこと」の源泉はそこにあるからである。しかし、それが十分に実践されないことが多いのではないだろうか。

その解決の一助として本活動を設計し、実施した。本論では、筑波大学留学生センターで行われた「予備教育」初級クラス（2008年1学期と2009年サマーコース）での実践報告を中心とし、2009年夏の実践フォーラムにおけるポスター発表で得た考察を加えて述べてみたい。

2. 活動の概要

2-1. 当該クラスについて

筑波大学留学生センターの予備教育は、通常約10週間（250時間程度）にわたって実施される集中日本語教育である。主教材は『Situational Functional Japanese』（以下、『SFJ』とする）を用いる。

2008年のクラスは4月から6月までに行われた初級クラスで、1週間に1回（75分）、計9回この活動を行った。学習者は日本語学習歴の全くない6名で、国籍はモンテネグロ、ミャンマー、ベラルーシ、ペルー、ルーマニア、モザンビークであった。2009年のクラスは上記と同内容の予備教育に続いて1か月のサマーコースとして開講されたもので、この活動は1週間に1回、計4回行なった。学習者は6名で、国籍は、ペルー、アンゴラ、モーリタニア、バングラディッシュ、ニュージーランド、モロッコであった。どちらのクラスも20～30代の学習者で、うち1名が女性だった。2008年と2009年の学習者は同一ではない。

2-2. 目的

初級学習者が自分自身の話したいことを、既習の学習項目や既存の知識を使って話す力を伸ばすことを目的とした。筆者の考える「話す力」とは、「特定の場面での定型のやり取りや、指定された機能を果たすために話す力」ではなく、それらを下支えする、つまり、どのような状況でも必要な「まとまった事柄をわかりやすく話す力」であり、同時に「聞き手の気持ちに届く話す力」でもある。更に初級学習者にとっては「限られた語彙や表現を駆使し、メタ言語の技術も総動員して話す力」でもある。

その養成のために学習者は、1) 意味のあるまとまった話（以下、「ストーリー」とする）が聞いてわかる、2) ストーリーを再生しながら、「話す型」を自分の中に取り込む、3) 「話す型」を使って自分の経験や感情を話すことの3点が求められる。同時に教師には、目的に合った教材と授業のデザインが要求される。

なお、「話す型」とは、各課のストーリーに繰り返し現われる表現形式の「型」のことである。

2-3. スケジュール

本活動は、主教材『SFJ』での学習を後追いでいくように進められた（表1及び2参照）。既習の学習項目を再度登場させ、それをを用いてストーリーを作成した。ストーリーはできるだけその時の学習者の現実に近いものになるよう工夫した。1回の授業には5つ程度のストーリーが準備されている。

3. 教材の構成

以下の5つで構成されている。

- ①「ストーリーを聞く前に」：ストーリーの内容を推測できるようなQ&Aなどの活動。
- ②「読みましょう」ストーリー全文：学習者の読解能力に合わせて、ひらがな、カタカナ、漢字使用の割合を調整して書かれたもの。
- ③「聞いて書きましょう」：ディクテーションのための用紙。
- ④「話しましょう」：「話す型」習得のための練習、経験を思い出すためのQ&Aと、それを使って自分自身の経験や感情を話す練習。
- ⑤「書きましょう」：④で話したことをその場で書くための用紙。

WEB版『日本語教育実践研究フォーラム報告』
2009年度日本語教育実践研究フォーラム

回数 (SFJ)	テーマ	主な文型・語彙・接続詞等	感情表現	目的
1回目 (L1, 2)	毎日の生活, 欠席届	一般動詞, 肯定形と否定形, ～と一緒に, でも		毎日買うもの, 行くところの描写, 欠席の理由を考える。
2回目 (～L3)	貸し借り	借りる, 貸す, もらう 数, それから	困る	2～3文で自分のことを語る。「友達に～を借りました」「～を～ました。私は困りました」
3回目 (～L4)	誕生日	あげる, もらう, いる, いない, 助数詞,	ホームシック です	誕生日, 母の日, 来日前のパーティーについて語る。
4回目 (～L6)	私のアパート	～にある, ～がある, 形容詞, 肯定形, 否定形		住まいについて語る。3年後の住まいについて夢を語る。
5回目 (～L7)	食べなくな かったけ ど, 食べま した	Vたかった, Vたくなかった, 一般動詞過去肯定形, 否定形, 理由を表す～から	ハッピーです/ じゃありません, がんばります	日本に来たかったか, 来たくなかったかを語る。
6回目 (～L8)	私のお勧め	知っている, 知らない, もう, まだ～ていない, いる, ある, 形容詞,	ロマンチック です	お薦めの場所やデートコースを語る。情報交換をして楽しむ。
7回目 (～L9)	状況の説明	～と言う, ～とおっしゃる	びっくりした, 嬉しかった	状況の説明をし, 自身の「びっくりした」こと, 「嬉しかった」ことを語る。
8回目 (～L11)	研究室で発 表する	そして, それじゃ, 謙遜する	～てよかった	やや複雑な状況を説明する, 感情の変化を述べる。自身の「嬉しかった」こと, 「困った」ことを語る。
9回目 (～L13)	地震への備 え	～とき, ～ていた	怖かった	地震のとき, どうしたらよいかについて話し合う, 地震以外のニュースについて語る。自分自身のニュースについて語る。

表1 2008年のクラス・スケジュール

回数	テーマ	主な文型・語彙・接続詞等	感情表現	目的
1回目 (～L7)	嬉しいプレゼン ト, 悲しいプレゼ ント	あげる, もらう, 形容詞	嬉しい, 悲しい, 困る	エピソードを披露して小さい自己開示を図る。
2回目 (～L9)	何か言いたい	～と言う, ～という意味です	嬉しい, びっくり する, 何か言いた い, 好きです	自国と日本との習慣の違いを説明して, 意見を述べる。
3回目 (～L7)	ハッピーですか	(表1の5回目と同内容)		
4回目 (～L11)	日本にいると思 います	～と思う, ～と思った, で も～だった, ～たいと思う	がっかりする, 幸 せです	予測と反したことを話す。将来の自分について話す。

表2 2009年のクラス・スケジュール

4. 活動の手順と留意点

本活動は基本的に次のように行う。

- ① 教師がストーリーを語り、学習者は意味に注意してそれを聞く。
- ② 聞き終わったら、学習者がストーリーを再生する。すぐに個人で再生することが難しい場合は、まず、ペアワークで行って、次に一人ずつ行なってもよい。ストーリーを聞かせる回数は学習者の理解に合わせ、1～3回程度で調整する。
- ③ 教師は学習者が「意味」を正しく聞き取れて再生できたかに留意する。助詞の間違いなどにとらわれ過ぎないようにさせる。次の段階として「形」に注意を向けさせる。
- ④ ストーリーを学習者に配布し、教師が読み聞かせる。
- ⑤ ディクテーションをする。
- ⑥ 「話す型」に沿って、学習者自身の経験や気持ちを語る。
- ⑦ 話したことを辞書を使わずにその場で書く。

活動全体の留意点として初回のオリエンテーションで次のことをよく確認する。

- ① 重要なのはストーリーの意味を理解することであって、全体を暗記することではない。意味が合っていれば、文の形が変わっていてもよしとする。
- ② ストーリーを聞くときは、頭の中で映像として見るように意識する。わかりやすくするために学習者には「頭の中に小さいテレビを入れて日本語のストーリーを聞きます。頭の中のテレビで見ます。ストーリーが終わります。もう一度、テレビを見ます。日本語で話します。」と説明する。
- ③ ストーリー再生の準備が整うまでには個人差があるので、順番で強要することはしない。ただし、他の人の再生を注意深く聞くのは非常に重要である。
- ④ 「話しましょう」で学習者自身のことを話す際、できるだけ「話す型」に沿って話すようにする。また、言い表せないことがある場合、辞書を使って探すことは極力控え、学習者自身が持つ既習の日本語の力を総動員して表現するように努力する。

5. 「ストーリー」の例

5-1. 2008年のクラス

5回目の授業で扱ったストーリーを紹介する(表3)。『SFJ』7課まで学習が進んだ段階(学習6週目、学習時間約130時間)で、ドリル練習にある文型「～たかったけど、～ませんでした」「～たくなかったけど、～ました」を中心にストーリーを作成した。

ここで学生の反応が非常に良かったのが、**5**のストーリーだった。誰もが心の奥底で思うことをストーリーで表現できたのが良かったようだ。更に、**7**と**8**は自分自身の来日に対する満足(または後悔)がテーマになっているため、まさにこの時期の学習者の心情に直結するこのストーリーに共感を覚えたようだ。

1	きのう、パーティーがありました。行きたかったけど、行きませんでした。宿題がたくさんありましたから。
5	きのう、ガールフレンドにクッキーをもらいました。一つ食べました。おいしくなかったです。食べたくなかったけど、食べました。ガールフレンドが作りましたから。
7	私は国でたくさん勉強しました。日本に行きたかったですから。そして、奨学金をもらいました。4月に日本に来ました。私は今、ハッピーです。
8	私は4月に日本に来ました。国に家族がいます。ガールフレンドもいます。犬もいます。大きいアパートもあります。日本に来たくなかったけど、来ました。私は今、ハッピーじゃありません。国へ帰りたいです。
9	私は日本語でたくさん話したいです。日本語の専門の本を読みたいです。日本語の新聞も読みたいです。先生や友達と日本語でディスカッションしたいです。富士山や北海道や京都に行きたいです。日本人の友だちをたくさん作りたいです。今、日本語があまりわかりません。がんばります。

(2, 3, 4, 6のストーリーは省略)

表3 2008年のクラス 5回目のストーリー

ストーリーの再生とそれに続く「話す型」に沿っての練習の後、「Are you happy? 日本に来たかったですか。来たくなかったですか」という設問で学習者がそれぞれの胸のうちを話した。授業終了時に10分程度で学習者が書いたものを挙げる(表記は原文のままとした)。

学習者1

日本にきたかったです。日本ごをはなしたいです。でも、かぞくをおいていきたくなかったです。でも、いま、ちっとかなしいです。でも、日本で旅行したい。そして、かぞくがきたかったです。日本ごはとてもむずかしいですから、べんきょうしたいです。がんばります！
いまはハッピーです。

学習者2

にほんにくるまえモンテネグロ大学でぶつりをおしえました。
わたしは日本でぶつりのべんきょうをしたかったです。
日本語をべんきょうしたくなかったです。えいごではなしましたから。
2日4月にほんへきました。
くにでかぞくがいます。そしてわたしのがくせいがいます。
日本へきたくありませんでした。
いまは日本でとどまりたいです。ともだちがたくさんいます。ホームシックじゃありません。
ハッピーです。

学習者3

私は4月2日に日本に来ました。くににきれいアパートがあります。かぞくがいます。
ともだちもいます。いぬとねこもいます。
ボイスレンドもいます。おにいさんもいます。
日本にきたくなかったけど、きました。
私はハッピーじゃありません。でもらいしゅうおにいさんとおかさんは日本にきます。らいしゅう私はハッピーがあります。

学習者は「話す型」を利用して、自身の心情を表現している。間違いはあるが、それにとらわれることなくその時点で習得した日本語を駆使して表現することを楽しんだようだ。また、否定的なコメントが続いた後に、肯定的なコメントを入れ、前向きな締めくくりで終わるといった「型」もストーリーの構成から学んだようだ。

5-2. 2009年のクラス

表2の2回目の授業で行なったストーリーを紹介する。既習表現「～と言います」「～という意味です」を使って、学習者にとって異文化である日本社会で感じた戸惑いや、言葉の意味についての意見を述べることを目的に行なった。

ある事柄を他者の発言を引用しながら説明する場合、「～と言います」が適切に使えると格段に話がわかりやすくなるが、これを実際に使いこなすことは難しい。以下のような内容と分量の練習を行なうことで、自分自身の事柄をわかりやすく順を追って説明することができるようになる。また、「～という意味です」が使えるようになると、未習語に出会ったときや、言いたい言葉が日本語で言えない場合でも、「言葉を言葉で説明する」ことが可能になり、コミュニケーションの壁を乗り越えることができる。

- | | |
|---|---|
| 3 | おととい、バスに乗りました。隣の人がくしゃみをしました。私は「god bless you」と言いました。隣人はびっくりしました。私もびっくりしました。
私の国で「god bless you」と言います。でも、日本で言いません。私は何か言いたいです。 |
| 4 | おととい、コンビニに行きました。コンビニの人が大きい声で「いらっしやいませ、こんにちは」と言いました。私も大きい声で「こんにちは」と言いました。コンビニの人はびっくりしました。私もびっくりしました。
私の国では店の人もお客さんも「こんにちは」と言います。でも、日本で言いません。私は何か言いたいです。 |
| 5 | 友達と約束をします。中国語で「 ^{フジェンブサン} 不見不散」と言います。これは「会いません、帰りません」という意味です。「約束を忘れないでください」という意味です。私はこの言葉が好きです。 |

(1と2のストーリーは省略)

表4 2009年のクラス 2回目のストーリー

ストーリー再生の後、「あなたの『何か言いたい』ストーリーか、「この言葉が好きです」ストーリーを書きましょう」という設問で学習者が話し、授業終了時10分程度で書いたものを挙げる（表記は原文のままとした）。

学習者4

毎日、コンビニへ行きます。コンビニで、お客さんはお金をはらったあとで、みせの人は「ありがとうございます」と言います。でも、日本人のお客さんは「ありがとうございます」と言いません。私の国で買物をしたあとで、みせの人もお客さんも「ありがとうございます」と言います。私は何か言いたいです。

学習者5

私の名前と日本語の漢字「勇」はにっています。この漢字は「いさむ」といいます。これはえいごで「BRAVE」といういみです。私はこの言葉が好きです。

学習者6

私の名前はコーエンです。日本語の漢字で「公園」と書きます。これは英語で「public park」といういみです。かなしいですがおもしろいです。イサームさんはラッキーです。日本語の漢字で「勇」と書きます。これは英語で「BRAVE」といういみです。

私はアンラッキーです。でも、「公園」が一番好きです。

学習者4はここで学んだ「話す型」を使って、母国と日本との違いを的確に述べる事ができた。学習者5は自分の名前の音にちなんだ漢字を取り上げて説明している。それを聞いていた学習者6は、自分の名前を表す漢字と学習者5のそれを比較し、わかりやすく面白く意見を述べることに成功している。

この活動ではこのように楽しみながら学習者間で学ぶ場面が多く見られ、その結果、学習者は「相手を意識してわかりやすく話すこと」「相手に届く内容を話すこと」を重視するようになる。また、毎回、自分自身のエピソードを話すことによって小さい自己開示がなされ、学習者同士の関係を良好にすることにも役立っている。

6. まとめ

この活動の実施によって初級学習者の話す力を伸ばすことがある程度実現できたと考える。この活動の基盤にある筆者の考え方をまとめると、次の8つになる。

- ①内在化：学習言語である日本語を、学習者が感情や経験と結び付けて自身の中に取り込むことを常に意識させる。
- ②意味重視：複数の学習項目を含んだ、意味のある、全体としてまとまったストーリーを聞くことが重要である。
- ③触発：生き生きとした感情・記憶を刺激する「クスリと笑える」「ホロリと泣ける」「あるあると思える」ストーリーが効果的である。
- ④聴解優先：聞いて理解できることは話しやすく、読みやすく、書きやすいため学習が進む。

- ⑤訓練：「話す型」を習得するためには一定量の「意味のある、楽しめる訓練」が不可欠である。
- ⑥メタ言語：言い換えの技術や質問の技術など、言いたいことが言えないときに、それを乗り越える力を同時進行的に習得することが必要になる。
- ⑦他者へのまなざし：聞き手に配慮することで、わかりやすく話すことができる。互いを尊重し、クラスを楽しむことにもつながる。
- ⑧進化する教材：学習段階に沿って「身近なこと・自分のこと」から「社会的なこと・普遍的なこと」へ内容も方法も進化していく。

言語学習の基本的な目的は、より良い自己を実現することだと筆者は考える。言語を用いて真理の探究や美の表現をし、問題解決や自己開示を通して良好な人間関係を作ることなどがその一歩となるのではないか。そのためには学習者の「本当に言いたいことが言える力」を伸ばすことは教師の重要な仕事となる。その手段として文法・文型・語彙などの学習/教育があるはずだが、その主従が逆転してしまうことも少なくない。今回の実践は小さいものだが、筆者の考える本来の言語学習の一助になり得たと思う。

今後は、本稿で紹介した内容に続く、初級後半から中級レベルまでの教材開発と実践、本活動の評価の方法、また、メタ言語技術をどのように組み入れるとより有効かという点について検討し、改善を図りたい。

参考文献

- (1) 川口義一 (2004) 「表現教育と文法指導の融合—「働きかける表現」と「語る表現」から見た初級文法—」『Journal CAJLE』 Vol.6, Canadian Association for Japanese Language Education : 57-70
- (2) 杉浦千里 (2009) 「話す練習実践報告—初級学習者の「話す力」を伸ばすための試み—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集 24 号』, 69-83